幼児と表現

－パフォーマンス教育（その5）－

中村 ウメ

はじめに

個性化教育の尊重・のびのびとした教育の考え方が、集団画の姿を拒否することに展開していることを察知するたびに、教育の行く揺れに不安を感じる昨今である。これまでの教育に理想の型が示され、今日においても一見する内容において、子供中心に遊んでいる姿を公開モデル幼稚園として示される故に、問い教師に誤解を招ねく所以となっているのである。教師のとらえる姿は子供の遊びを周囲から見る姿として、いわゆる「見守り教育」のことが交わされる程、子供の今日のるべき姿として理想的教育の姿に表面的形を捉えていて、集団・集合による教育の姿や、行事のための統一された姿を悪い教育の姿として評価しかねぬ幼児園教育の方向と内容を見い出そうとあるのである。ここには幼稚園に遊びに来る子供とする子供理解が、子供のやりたいこととして見逃された、教師の理念の通わないバラバラな子供の姿がある。それは教師の姿を子供が受け入れようとして、また教師の姿を認めることなく、今何が大切かを知ることのない子供の姿、集まってみてもワイヤワイヤガヤガヤといつまでも止まない姿をとらえるからである。そのような姿に果たして個性のどんな成長がかかげられているであろうか。

盛岡大学附属愛育幼稚園におけるパフォーマンス教育は、音楽教育を中心として始められ、音楽は音楽全体をとおして伝達することの大切さや、子供の同じ年齢、異年齢、教師との関わりなど、さまざまなコミュニケーションから、遊びが発展する内容を教師が視察し考察のもとに関わることによって、個人の成長を捉えることと追求して5年になる。この実践例は上記の悪い姿を見ることはないと自負している。音楽の能力について進捗研究により確かかに成長を見いだし発表しているところであるが全体の教育のビジョンをとおして、個人の成長が確かな内容であるが、今日調査できた内容をもとに個性教育のあるべき姿を考察する次第である。

Ⅰ 遊びを記録する方法

のびのびと展開する沢山の自由な遊びから子供の特長を少ない教師でどのようにとらえたらよいかは、どこの幼稚園においても問題としている事柄である。危険がないか注意しているだけでは今日良く言われる「見守りの教育」にしかならない。遊びの様子とそこに居る子供関係を記憶して、次ぎの遊び、また次ぎの遊びへと足を運ばなければならない教師の役割がある。一方遊びが豊かになることは子供が、今大好きなことに熱中していることである。遊び込んでその内容を隠しさせているところには、子供同士のルールや、なんらかのコミュニケーションが成立していることを捉えるのである。前回、本大学記紀第3巻に示すとおり、遊びの姿は全体的な子供の表情をもって影響しており、子供の個性能力とにスパイラルな関係にあって確かに成長しているのである。

さてその遊びをどう捉えるかである。教師は従来、教育の形にこだわってきている為に、どうしても〇〇遊びをしている」とする遊びの形を見ると、全体的な形理解に頼ってしまい、結局は見守るだけになってしまうがである。
ここに必要とすることは遊びの内容をきちんと記録することである。記録による遊びの姿や遊びの進行の学習がたくさん学びを前倒すからである。その記録の内容を上げると次ぎのことがいえる。

1 遊びの仲間とその名前
2 遊びの中心者と仲間の関わり
3 捉えた遊びの過程と経過要素
4 子供の遊び内容と反省
5 遊びに対する教師の配慮

1 遊びの仲間とその名前

平生の仲間関係を知る教師はやすくなる特徴をもつ。いわゆるグループや遊びを始めてしまいたいという状況である。子供の遊びの中には思いかけない子供の仲間関係が時として見られることがある。瞬間的に話し合うとするタイプの遊び関係、誰が受け入れていかその仲間の関係などは、認めることができる atravaguanがある。気づくまで細かく記録することが大切である。記録による新しい子供関係を知ることになるからである。

2 遊びの中心者と仲間の関わり

3人連れから6人連れなど遊びの中心者は捉えやすい。が中心者ははたして仲間の仕方・付き合い方を上手に関連を進めているかその関係を知ることが大切である。グループ仲間が満足して遊んでいるか、なんとなく仲間で居るか教師は知ることが大切である。仲間関係が発展しない場合や、覚悟とされる時は子供同士で話すう場を大切にすることが教師の役割である、教師自身の考えのもとに急いで解決することではない。子供は子供なりに、大人からすると理由があって理解のないような話し合いの中に、容易に解決することがある。また大人がおおむろハラハラする口論と言葉の使い方であっても子供のルールのもとに解決することがあることが多いからである。そこには子供のさまざまな自己表現があり、教師は子供の主張を全体の成長段階から理解して、いろいろな角度からヒントを与えるなどの関わりをもつことが大切であって、危険性の高い限り結論を急いではならないのである。ゆとりのある関わりと記録による適切な判断が大切である。

3 捉えた遊びの過程と経過要素

これまで遊びが継続するところに見事な子供の関わりや、遊びをとおして表現する技能の成長をとらえている。その発展する姿はいろいろなこだわりを持っていて、個人個人の能力を存分に出して交わりを豊かにしていることが多い。遊び継続要素の記録無しではその個性を見逃してしまうことになる。

一方、継続できないところには友達との関わりを知らない、人間関係の未熟さを見いだしている。また遊びに関知のない子供は、集中がかけていることが多い。或いは家庭においていつもセットされていて、自分行動の無し、依存性環境の要因をかかえていることもある。よく記録して、その内容によって個人にあった適切な配慮が大切である。

4 子供の遊び内容と反省

子供はなんとなく遊んで言葉をもたないことが多い。遊びのことだわりの第一歩に、遊びを報告することは、言葉に対する責任と自分について自治を得ることになる。特に友達の前に発表することは、子供の幼稚園の位置を認められることでもあり、友達と一緒の場ということも、共に発揮する友達関係を認め合うことになる。そこには多くの人間性と、大きな個人の成長を捉えることになるのである。また遊びの内容と、遊びを継続させるためにその内容を維持すること、教師中心として明確へのつながりをとるということは、登園する遊びとして目的意識が高められるのである。また教師の記録による確かな遊びをとらえた報告は、実践何というかつながりな内容を写し子供から教師の信頼を得ることとなるのである。よって教師の捉えられなかった遊びに関してはその理由を説明して次回のチャンスに期待をもたせ、発表機会を与えること
とが大切であり、時間や日程のゆとりのもとに全員の子供への配慮を心掛けなければならないのである。

5 遊びに対する教師の配慮
子供の遊びは全てが、ベターとして受け取ることが第一の条件であり、遊びと子供の関わりを判断することによって、現在成長しようとしている芽をとらえがたい大切である。教師はその芽をとおして遊びに関わることを忘れてはいけないのである。教師の個性もさまざまであり子供と同様にその個性が教員関係によって認められることから始まなければならないが、子供の個性をとらえることもできないはずである。教師は自分の楽しいことに子供の目線とともに仲間になって遊びに加わることが大切である。遊びに入れない教師は子供理解が困難な教師であるとしても過言ではない。遊びながら記録を中心としながら個人個人の特長をとらえることが大切な役割とされるからである。教師同士の記録をもとに遊びの捉え方、個人の関わりかたを検討されなければ記録の意味をもたない。その遊びの内容から教師は全体のクラスに対する関わりを工夫することが、これまでと違った教師の役目として、指導技術能力として期待されているのである。遊びの正しい記録や教師間の交流が幼稚園全体の遊びを豊かにし、やがて一人ひとりの個性が豊かに成長することは確かなことであるゆえに、教師間においても教師一人ひとりの個性と役割を認め合う良い交わりが無くても、子供の個性を捉えること、また個性の成長に寄与することはできないのである。勿論教師の遊びの関わりに、経験豊かな教師の中心者が人間性豊かな者として実在することも子供のリーダー実在と同様に大切なことである。

II 子供にとっての個性能力とは

集合した時にいつまでもワイワイ・ガヤガヤをしていて現在実践していることに無関係な表

情をとらえる教育は果たして個性を生かした教育であろうか。その姿は子供中心を提示していて子供に任せた状態であって、子供の表現に学びを期待するときおのずと学びの限界が生じるように幼児の姿に成長を期待できないである。その子供姿はとても気づかいない状態で興味をめぐって目線をかえて簡単に移行して遊ぶ繰り返しをとらえることになる。この姿は3歳の集団と個人の関わり、遊びの中に溶け込めない集中できない姿に似ている。また自分から創意・工夫することをしないで、容易に遊びを選択し自己を発散させていく状態をみるのである。よって人の考えを享受し工夫しようとする能力の育たないままに子供は育っている今日の問題ではないかと思われるのである。かつて一斉教育として教師の計画を優先し子供に忍耐を強いて居た頃と違い、個性を生かした教育とは環境に適合させて自分を発揮させる能力を期待されているのであって、適合能力にさまざまな姿をとらえるとしても先のワイワイ・ガヤガヤの姿は適合しない姿であって良しとしているのではない。

森 隆夫は個性とは能力であり、性格であり両者の統合としてとらえている所以である。また個性とは人生の得意技であり、自信をもって持たせることが個性を生かした教育の基礎・基本であるといっている。

子供の個性とは自己発散的環境から自己満足を得て他者との関わりから自分を知ること自分の得意とすることができ表現することに、ようするのに、自分の自慢ができることが、友達や先生から認められて自分の力として表現され、いろいろなコミュニケーションの姿が認められていく環境、環境適応する子供の姿ではないかと考えられるのである。ここに全体と自分の関わり・言葉をかえると集合と個の関わりを捉えるのである。集合の中にいて今捉えなければならないから自分から考えようとしていない子供の育ちは、新しい幼稚園教育の問題としてまた幼児関連の新しい問題として現在起ころうとしている残念である。

幼稚園は総合的な子供の育ちを重点としていて遊びの捉え方を改訂の意図としているのであ
が、子供はどんなことにも興味をもって、仲間と遊びを模倣する学びは大きい。しかし自分から学びとろうとする姿勢の育成として考察される、教師の間接的な指導から直接的に関わることを書いて見たい甘い意欲的行動が無くては子供の直接的学びの発展にはならないのである。学びの手段を学習し次に個人の学習として意欲につながることが個性の成長する意欲的姿ではないだろうか。幼稚園の子供に「○○先生に聞いてみよう」「○○先生に知らせよう」とすることとは子供同士が先生の個性をとらえていて教えることや同じ気持ちになって理解してもらえる信頼関係を把握した先生を選択し送りきりの姿がある。信頼の枠組みに教えられたことは子供にとって確かな学びとなり自信を持つ行動として育ちの姿をとらえるのである。

教師は集団している子供の表情に集団事項に対する子供の能力把握があってこそ、子供の前に絶対の信頼と魅力のある人間環境要因として存在し、保たれない場合に誠実となるのである。上記の思い例として教師が中心となる時には子供に通じる真剣さに欠け興味がうまれてしまうように子供だけではない一般を通じる問題でもある。反面、子供が中心になる場合は共通の育ちの中に信頼関係によって集中する学びが多く子供全体からの集中は絶対である。集団に対する個人的教育の配慮を今一度考え直すことが大切ではないだろうか。次ぎに、子供の遊びと教師の関わりの内容から音楽的要素のある遊びの例を捉え考察する。

III 遊びのホップ・ステップ・ジャンプ

幼稚園の子供の遊びから最初に出合う表情に社会全体の問題である過保護の状態とする大人の監視から解放された遊びをなす子供達の様子をどのようにして遊びに入るか大人の手を持って述べられる子供が見られる。幼稚園という社会生活に入ることの第一歩としてさまざまなルールのもとに生活することを「つけて」として学ぶことになるのであるがその時期に、子供と遊びながら教師は学びの基礎・基本にふれなければならないうのである。実際に幼稚園の今日の遊びの姿にどのようにして子供を導くべきか幼稚園の学びの基礎・基本と思われることにどのようにして伴わせることが良いかなど考え続けた事柄がある。これまで遊びに参加する姿から子供の人間関係に社会性を読み取ることと、模倣の学びや遊びをとおして創造性が生まれ認められる成長する姿を読み取ることと、教師の心を読み取ることに重点をおいているのであるが、千差万別に展開する子供の遊びの中にどのようにして子供の学びが豊かになるか・自分から求め学ぶ道を知る子供の育成はどこにあるかとする疑問をもった毎日であったとしても過言ではない。ようするにこの遊びから子供の状態を読み取ることを知って必要と思われる基礎・基本を個性教育としてどう関わることがベターであるかその機会と方法を考え続けていたのである。瞬時にきまる子供を前にして全てに即時により豊かに適応する教師の姿をもっていかたのは、子供の遊びの模倣という原点から生まれた事実であった。そこには教師の形を求めていて子供は何を要求して関わるかその根拠としての考えが根付っていたと言えるのである。幼稚園に求められていることは生涯を通じて学びの道とさえ言われ子供の人格形成を第一として教師の姿勢を具体化しようとと考えていたのである。が当面の遊びに関わらず現在の教師の能力と労力の限界を考察して子供の遊びの基礎・基本として子供の学びのよりどころを見いだせなかったのである。子供だけで遊ぶ、ようにする子供の遊びによる学びをまかせることは、自ずと子供の学ぶことを知らない者の自己学習の限界に等しく、他者の学びを受け入れながら自己確立しようすることのステップがなければ幼稚園の育ちは期待できない。そこに必要なことはより専門性豊かな個性を見抜き治療できる指導内容であり、子供を負担なく正しい基礎・基本として早く修得されることである。が幼稚園教師の能力として労力の現状においては限界があり事実である。

今日の状況において幼稚園教師の姿勢に期待で
中村：幼児と表現

きることは子供とともに基礎・基本の学びとし
て実際を確かめようとする遊びの姿勢である
。読書をとおして知る物知り遊びの姿・ビデ
オを見て確かめようとする遊びの姿・工夫した
い道具素材を実際に探し歩いている姿・取り扱
いを知って実際に試してみる姿・自然や環境の
変化を知って受け入れられる姿そして実演をと
おして比較しながら自分にあった方法を選択し
行おうとするような、子供が自立できる

「自分から求め学びとろうとする方法」

を導くのが、生活のルールの学びの時期に大
切な子供との関わりであることを知ることができ
たのである。

森は生涯の学びを仏教の「修・破・離」にた
とえて、トップを修・ステップを破・ジャンプ
を離の段階として人間の総合的な学びの姿勢を見
極めているが子供の遊びの模様・創造・発展の
総合的な成長を期待する上において狭義の内
容によってこの論理は考慮されるのである。

自主性の育ちに期待する岩上廣志の授業の進
み方や音楽の授業にもその例を読み取ることが
できる。基礎指導の提示するトップのレベルが
あり総合的な成長のもとに人間関わりをもちな
がら音楽の創造性を期待するステップ、そして
児童生徒が何らかの題材をもって参加する
総演出によるすばらしい音楽の実現のジャンプ
のレベルを見いだすことができるのである。そ
こにいる教師の役割は子供の音楽をアピールし
て統一することは無難、全体を安全運転する
ような指揮者の存在を見せているのである。
こうしたことを幼稚園に置き換えるとトップ
は幼稚園という社会生活のルールを知るとき
に培うことが全体の育ちの過程において個が育
つうえにとって大切なことである。子供独自の
表現が個性的表現としてみられることはステッ
プとしての姿であり、ジャンプのレベルは幼稚
園全体を知って子供自身がやりたいことを構成
する姿、自分を知って参加する姿であり、そこ
に居る教師の役割は前述の安全運転の姿勢で
ないかとさまざまな姿から考える次第である。

前項のワイワイ・ガヤガヤの姿はこのトップ
のレベルに教師が遊びと個性教育を理解できず
見守りをしているだけに止まって居たか、ある
いは遊びにどう関わるかとまどっていて見逃し
てしまって居たかの結果の表情ではないかと考え
られるのである。

遊びの姿を子供の立場から、トップ・ステッ
プ・ジャンプレベルを考えるとき、個人・年齢・グループそして幼稚園全体の内容それぞれ
に適合されることに気が付くのである。狭義の
もとにとらえるとトップは遊びの見る・聞く・
模倣による学びであり、ステップはやってみよ
うとか、考えてみようと自分から行動に移す
学びであり、ジャンプは自分の考えを実現す
る、また周囲を知って自分こだわって参加す
る学びではないかと、幼稚園に生活して子供の
遊びをとらえ、そのレベルを判断するときに考
えるのである。

実際の姿の中でも音楽表現遊びとして上記の
ステップの経過をとらえた平成5年度の良い
姿・活動に次の例がある。

1 個人としての姿

・ きいろいコラス女児A

・ ベートウェンかての男児Y

2 グループとしての姿

・ 女カーニバル女児K・Y・S

・ 仮面ライダーショウ前座音楽係男児M

3 全体としての姿

・ 年長児による全員組合奏と歌と教師

ここにあげられる例は音楽を求める自分の意識の
高まりとしてのステップレベルの姿や、音楽活
動を構成していく人との関わりを考えるジャン
プステップの姿としての実際例として評価する
のであるが、いわゆる音楽遊びと個性の成長を
捉える要因について順次考察する次第である。

1 個人としての姿

女児Aと男児Bは聴覚による音感覚が鋭敏か
つ繊細な子供であり音楽全体をとらえることが
できて自分から今必要とする音楽を求めること
や、音楽の表情を要求できる子供である。次に
とらえた表情例を述べる。

[年長組女児A 3月生まれ]
自分から好きな音楽タイプを選択し、遊びの中自分から申し入れて仲間に楽曲を合わせながら音楽表現活動ができる。総体的により豊かな活動ができる。
・運動会に使用する音楽「ドレミのうた」の太鼓の練習が耐えられないという表情を示す。
・通園バスのなかでコーラスしようと思試みる。「指揮者」「うた」「音楽係（伴奏のつもりでうたと同じメロディーをラララで歌う係）」の役割をもって楽しむようになる。教師も共に楽しんだ。
・通園の仲間が歌えてくれる歌として「きよしごのよる」が季節はずれに歌われる。バス担当の教頭による配慮があり、報告の報告から年長児集会の発表機会に再現して一層勇気をもつ。
・公開保育に遊びの最後まで秋の葉色を（えのくのままあわせ）続け自分が考えた壁面の不足な所に張り、作業をやり遂げたことに参観した教師から好評を得ている。
・教員室の大人の歌楽歌集をながめたり借りに来ることが手続き歩いている。
・クリスマス批判聖誕劇マリアを表情豊かにやさしさを演じた一人での歌を歌う。指導過程のマリアになりきったいろいろな表情の豊かさは教頭や担当した先生方の感性に驚いている。

２グループとしての姿
[年長児女性K 5月生まれ]
[男性Y 7月生まれ]
[女性S 5月生まれ]
何かをしようといつも遊びの変化を工夫しているグループであり遊びのためにその過程を納得する生き合いができる仲間である。この3人の他に年長児O・E・T・Hが時として仲間にに入る。話し合ってお互いのやりたいことをとりあげて役割を決め、それぞれに作り出す音にまた表現したい方向に協調できる可能性の伴う遊びとしては高度なジャンプステップグループである。
・Kが指揮者・Oがピアノの係通音楽係として呼び合う・YとSとEはうた係になり舞台を作り演奏会ごっこを考案。知っているマンガの歌を演奏するか音楽係が思うように出来ず聞かれ側となって勢いを無くしてしまい続ける。
・年中児が劇場ごっこにスカートをつけてテーブルによる音楽にのって踊りだしているのを見て、部屋を半分仕切って口音楽でそれぞれに回転しながらポーズをとって遊びだしたが、隣のブロック遊びの男児に「見
中村：幼児と表現

「女カーニバル」
ピアノ担当児Kと音楽係児E、H、S（後方中央児Y
前後左右から児E、H、S）と動物遊びの前手児O


t

えた、見えた」とはややふさわしいいかたち
ているところに私が加わり、ピアノの即興
を入れて踊りは再現された。ピアノを気に
していたKが自分からその要領を求め、ト
リルの演奏やペダル利用を喜んで弾き出し
遊びは続く。

・前後の遊戯が公開保育実演することの約束
を得るとステージ内容として3つのステー
ジ（コース名）をピアノKとY・S・E・
Hの4人のそれぞれの踊り・ピアノと鈴を
利用するリズム合奏・ピアノと鈴をもった
踊りを考え、全ステージをスペシャルコー
ースなど名付けてお客様に呼びかけ、全体で
7〜10分位のピアノ即興を伴う演技と演
奏を続ける。ピアノのKとグループの中央
に位置して挨拶するYの目線によって即興
がまとまり全く違ったあいだ遊びをして楽しむ
Oがピアノの音が低い方に移動して止まった
ときに「アオーマー」と泣き声をを入れて参加
するグループとの約束に答えている。

（写真1）

公開についての分科会に遊びのきっかけ
に対する質問がなされ、また当日の講師館
先生から好評を得た表現の一つである。

・Eがティンパニーに、Oがオルガンにと夢
中になり遊びの方向が変化するとK・Y・
Sの仲間意識は強く「白鳥」と題をつ
けたステージを考えKのピアノとYのエレ
クトーンの同時即興による音楽によるSの
踊り舞台に変化している。写真2）

鍵盤利用は指定しない為に音を見つけて
して演奏しているがお互いのフィーリング
によって変化させて熟練しているので
ある。2人の音と音が不思議と共鳴してい
て静けさ・激しさ・音の動きの方向を一致
させていることに驚いた次第である。ちか
みにKは音楽の習いごとは無く、Yは始め
たばかりのレベルであって、実際にピア
ノ・バイオリンと学びステージ経験のある
EとO、さらにパレードをたしなむOの能力
による具体的な表現はこの遊びに生かされ
ていないKとYの発想に近い音楽構成であ
る。
「白鳥」

女児Kのピアノの音に女児Y（写真奥）がエレクトーンで音を重ねそれを聴いて即興的踊りを舞う女児S
（写真手前）の遊び

[年長児男児M8月生まれ]

4歳の時、父親の転勤によって転園した子供で母親の教育熱心さが影響して特定の仲間がなかなかとれていっているものの、もてる能力の必要なときに誘われ、その遊びの中にいてどのような役割かを考え表現できる構成力のあるタイプの子供である。

・さまざまなことを思いつくと作り出すが母親の愛情に包まれ、親や同様の発明製作が続き、家庭でつくったものを幼稚園に持って来て自慢をし大切に扱っていた。めずらしさにささえて子供が集まり遊ぶことはあっても取り扱いに忙しないだけだがその場に残り一人で工夫している姿があった。

・仮面ライダーショウの前座説明に彼女仲間から起用されると習っているピアノのライオンを奏でながら造られた舞台裏の様子を伺いながら本番前のロコミをみごとに実演した。ちなみにこの遊びは公開当日実演されその後はウルトラマンショウとして同じ形の遊びをもって4歳児に受け継がれた。

3全体としての姿
[年長組の演奏]

毎年12月に幼稚園合奏大会が楽器会社によって企画されているが、大会参加賞のご褒美がいただけて、すばらしい企画で演奏できることと何よりも他の幼稚園の演奏（自分達と同じ子供の演奏）を鑑賞できる機会として出場することは幼稚園の伝統的な行事の一つになっている。

教育課程改訂によって演奏曲目や演奏内容への配慮を変え、子供達の遊びにある内容の曲目
選び、子供の演奏方向にそって幾度と見直しをしながら仕上げている。平成5年の選択された曲目は「むしのこえ」・「アルハンブラの想い出より」・「あしたも天気」の3曲である。
以下に曲選択と子供の様子を示す。

・むしのこえ・楽譜1
秋の季節として知られている歌であるが平成5年度の年長組は4歳の時、既に一つの曲から他の旋律を聞き取って演奏できる子供の育ちを知っているために教師提案によってグループに別れて輪唱を行ったところ喜びとなってバスの中に応用され久しく続けたことからステージ用に工夫されている。
8分音符による虫の鳴き声鍵盤演奏の子供は希望者のかなから表情豊かな子供6人を決め、歌の方は音域の関係からか希望者は女児に片寄っていたが2点指の音を虫の声のように余裕を持って歌える子供を希望者の中から決める。
虫の声の演奏にのって強く弱く演奏し、また歌っている。

・アルハンブラの想い出・楽譜2
平成5年度の幼稚園目標クリスティ教による礼拝の奏楽を鍵盤で音を探し始める子供が増えたところで演奏しやすいメロディー部分を全員に教える。4パート編成に編曲。
子供は自分にあった好きなパートを決めて演奏していてパートの人数は強制していないが、5台限定のかっこうのいい巴斯楽器は希望が多く決まるごと感がיכこである。今回は男児一人による演奏となっている。
礼拝の曲のため、ゆるやかな表情とロングプレスの演奏となっている。子供達はこの音楽に「心のなかの音楽」と名付けたことから遊びの音楽会にも「心の音楽会」として用いられている。岩手県民会館による演奏のための子供の心意図は「幼稚園にはいつもも神様が来てくれるけれど県民会館にも神様が来るように演奏しよう」と決められた。
子供の演奏への思い入れが安全運転の教員による指揮の表情を越えた演奏表現となっている。
この曲の内容に「お花畑で遊んでいるみたい」「いろいろな点が集まっているみたい」などと想曲を言葉で表現していて（6月24日）興味深い。

・あしたも天気
遊びの中で歌わリズムのって気持ちを表現する音楽で子供と一緒に遊びながら演奏技能を適応させる為、鍵盤ハーモニカに主旋律を置き、特殊楽器としてティンパニー・大太鼓・タムハリ・電子オルガン2台を用いているが、教师と共に表現を入れて容易にマスターされている。特殊楽器は特に希望者が多く決め手されそうな先生に何日か撮り寄って来る光景があり希望者が全員に楽器に触れさせて曲にあった持ち味の子供は遊び出している。前回記要にあるとおり全体の音楽ラインの中で自分自身の受け持つラインをマスターする遊びによる関わりによって一人ひとりの理解を配慮されている。

年長組の合奏活動は3歳あるいは4歳の時代から期待をもって見ていて最初から担当したい楽器を決めている子供もいる。遊びの中にとらえられた曲からの決定は幼稚園生活の一部である。また、ほとんどの音楽全体を体に受け入れることが抵抗がないため、のびのびと豊かな身体表現を見せながら演奏を受け持っている。その表現は一人ひとりの思い入れがあり演奏全体を高めているのである。本幼稚園において片付けの合図を通してのレコード音楽が踊りに変化して片付けの進まない時がある。が状況を判断しながら教員は余裕をもって仕事を進めていている。例えばアンサンブルでスターになりきって踊る3・4歳児・即興的あるいは行事に使われた振り付けの音楽に5歳がリードして3・4歳児が模倣しつつ踊るなどがその特長である。また音楽は子供のリクエストが多く、一般に躍動する音楽に片付けは進むが、クラシック音楽は遊びを続けて
図例

1. 

2. 

3. 

する傾向にある。ここには音楽の表現を述べているが、お家ごっこ・レストランごっこ・迷路・レゴの組立てと昆虫の遊び等々、子供達のアイデアを連携で驚く遊びを見いだしている。さてこのような遊びと表現の能力が確かに、感性能力の高まり、情操教育の適度として考えられるか、子供の育ちとの関係は同様に認知できているか、独自の聴覚研究による聴覚中心の音楽理解、上田礼子による「人の絵」による子供表現しようとする内因理解、と、中田敏隆による新幼児用知能検査Bによる調査によって、子供の総体成長との関係を考察する次第である。

IV 幼稚園児の音楽的能力について

本幼稚園児のリズムの捉え方に旋律とリズムの抽出による表現方法を見いだした例に次の2つの例がある。
例1 木内光明とポールによるミニコンサートに音楽を聴いてメロディーのリズムについて手拍子をする表情と、友達と拍子をとってせっせと遊びをする表情の同時発生。
例2 ピアノ演奏による音楽を聴いて友達と一緒にお絵かたにやって歩く音にメロディーのリズムと拍子をとる同時発生。
以上の状況から子供の得意とする音楽理解能力を把握して「音楽は音楽で伝授する基本を大切にしながら子供との関わりを、一人ひとりのタイプに合うように考えている次第である。他の旋律あるいはリズム打ちを聞きながら自分の旋律やリズムを捉える方法、その姿は前回の本記に写真提示をして論じているが、幼稚園教師にとって音楽理解能力を期待される高度な伝授方法である。こうした交わりにあって音楽全体の表情がより豊かに再現される12月の年長児の音楽の聞き取りと瞬時の再現能力を調査した例1（調査日12月15日・16日）がある。
上記内容は平成4年度に引き続き実施されているが、今年度は2人の担任教師によって調査され教師の鍵盤ハーモニカを聴いて鍵盤ハーモニカで模倣再現する状態によって調査している。また同じ旋律を聴いて階名ドレミ唱による歌唱能力を同時に調査していて、結果は次の4グループに区分している。
評価グループ分け
1 全体を理解して進んで答えている。
2 アウトラインはほんの正しい。
3 提示された音楽の流れにならないが音節を最後まで聞き再現している。
4 最初までの聞き取りができない。
上記4段階の調査内容は次のとおりである。

男児鍵盤ハーモニカ（調査人数27人）

<table>
<thead>
<tr>
<th>楽譜例</th>
<th>評価</th>
<th>1人数%</th>
<th>2人数%</th>
<th>3人数%</th>
<th>4人数%</th>
<th>5・6人数%</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>調査1の①</td>
<td>2/7</td>
<td>16/59</td>
<td>4/14</td>
<td>5/19</td>
<td>22/81</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1の②</td>
<td>3/11</td>
<td>17/63</td>
<td>7/26</td>
<td>0/0</td>
<td>27/100</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1の③</td>
<td>2/7</td>
<td>14/52</td>
<td>4/14</td>
<td>7/26</td>
<td>20/74</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>楽譜例全体</td>
<td>5/6</td>
<td>47/66</td>
<td>15/19</td>
<td>12/15</td>
<td>67/83</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

— 88 —
中村：幼児と表現

Table: 女児琴盤ハーモニカ（調査人数 37 人／37 人中）

<table>
<thead>
<tr>
<th>楽譜例/評価</th>
<th>人数/％</th>
<th>2</th>
<th>3</th>
<th>4</th>
<th>1・2・3</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>譜例１の（一）</td>
<td>11/25 23/62</td>
<td>3/8</td>
<td>0/0</td>
<td>37/100</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1 の (一)</td>
<td>17/46 19/51</td>
<td>1/3</td>
<td>0/0</td>
<td>37/100</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1 の (三)</td>
<td>12/32 24/65</td>
<td>0/0</td>
<td>1/3</td>
<td>36/97</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>楽譜例全体</td>
<td>40/36 66/59</td>
<td>4/4</td>
<td>1/1</td>
<td>110/99</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

Table: 男児 歌（調査人数 27 人／28 人中）

<table>
<thead>
<tr>
<th>楽譜例/評価</th>
<th>人数/％</th>
<th>2</th>
<th>3</th>
<th>4</th>
<th>1・2・3</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>譜例１の（一）</td>
<td>0/0 18/67</td>
<td>3/8</td>
<td>10/37</td>
<td>21/78</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1 の(一)</td>
<td>1/3 17/46</td>
<td>2/7</td>
<td>7/26</td>
<td>20/74</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1 の (三)</td>
<td>0/0 10/37</td>
<td>4/15</td>
<td>13/48</td>
<td>14/52</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>楽譜例全体</td>
<td>1/1 45/56</td>
<td>9/11</td>
<td>30/37</td>
<td>55/68</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

ここに示された数値による鍵盤ハーモニカと歌の再現能力は、音楽を聴いて、あるいは友達の作った音を楽器で再現する模倣的遊びによる環境が影響していて、鍵盤ハーモニカによる再現が歌の再現より勝り、また音階が記憶されているものから基本的な音階として、音符の関係・リズムの把握に時間を必要としていることを意味しているのである。音階や強弱を読み取って歌う場合は表情による的確な答えに欠けているが鍵盤ハーモニカを用いるより音階を正確に答えられていることに注目したい。歌についての扱いは今後の課題となったのである。ちなみに 3 間正解者はビアノを習い公认技術をもつ基礎・基本能力のある児童 1 人であることが、歌と鍵盤ハーモニカが 3 間正解の児童と男児 10 人はやはり習いごとに関係する環境があり、鍵盤ハーモニカのみによる 2～3 間正解者の児童・男児の数は 16 人となる。合格者人数は図表に示すおりである。この状態は今後の幼稚園の遊びとしての音楽・音楽環境と音楽の基礎・基本の考察について学びの関わりについて追求する結果を示しているのである。

V 幼稚園児の目線

上田礼子の心理テストによる「人の絵」の調査は、報告者を対象としたものだが、それは描かれた内容によって現在子供が「どのように人を見ているのか・また人として何か興味があるか」子供の目線に関し一因としてとらえる一ひとりに関わる方法の一つの手段といえるものである。沢山の例があり限定できないところであるが、絵かれた内容に次ぎの例がある。また絵の上手下手下に、物体の何に集中しているかをとらえるのである。「人の全身を描いてい」し「顔に集中している」「目が大きい」「口の強調」「歪んだ顔」等々がある。

堅いライオンや柔らかいライオンの違いは、右側の好きな男の子と人形の好きな女の子の違いに等しく男児は角張った絵が多く、全体的に器用な女児の絵は細やかに描かれている。これまで子供の対応として考えられた絵との関係に次ぎに示す例がある。

・全身を捉えバランスのとれている場合
・健康的な育ちであって、自分の力で歩み友達を求めていける子供である。
・顔に集中して描かれている場合
・人の眼が見ているか、知恵が豊かで体の動きが伴わないアスタリスクの訴えの子供であり、その子供の顔を正面向けて捉えてゆっくり対応することが必要である。
・漫画の真似と違い目の強調・口の強調のはっきりしている場合
・育ちの体験から得る経験質を捉えていて子供が安心できる関わりから信頼感の育ちを考える必要がある。
・顔の外角・落書き状態の場合
・全体の育ちに影響している為に子供の育ちを待つ姿勢と周囲の子供との関わりから適切なスペシフィックが必要である。
中村：幼児と表現

「絵2」
縮図76％
顔の歪みのある場合
育ちの精神的内因性に問題がありその子供が安心して遊ぶことのできる友達など環境の配慮や安心できても心が開放される特別な対応を必要とする。家庭指導が必要である。

上記の絵に表れた子供理解による配慮のもとに一人ひとりの言語感性の導き方は工夫され、またグループと交わりをもとに子供の進むうとする方向性に習いながらの3の活動を全体の目標として実践している。その演奏会ステージ本番前の「人の絵」の表情がある。IVの鍵盤ハーモニカ3問と歌の2問以上正解者の絵は「絵1」に示すとおり個性豊かにのびのびと描かれていて、音楽表現能力と絵の表情に共通性を見いだすところである。またこの子供達は演奏者の中心であり言葉の内容を高めるきっかけをつくるグループである。ちなみにここに示された子供は年齢その内容にかかわらず、音楽の習いごと（ピアノ・バイオリン・バレエ）を12月現在続けているのである。（人の絵の調査日12月10日）「絵2」はⅢ-1・2・3に示された子供の絵である。上段は1の女の子Aの絵で左から順に6月9日・7月14日・そして12月10日調査内容、中段は1の男児Yの絵で同じく7月14日と12月10日調査内容、下段は2の女の子Kの同じく6月9日・7月14日・12月10日の調査内容である。女の子Aが音にこだわり始めめた心の音楽として特長を見いだすようになり、また友達との遊びを考えたしたころの特長は真中の絵になり左のタイプとはとえ方を離れをみいだすのである。髪のマリアを流しの歌を歌いは合奏会に会合にいて演奏をとげたときの表情は右の絵であり脚をそろえて腰の表情をとらえ今でウィークの目目にとだわれていた表情がやさしきかわいい両方の目に表現されている。Aは若干姉の遊びを見て育っているが音楽的な習い事の無いごく普通の家庭環境にある子供であり譜例1の音楽能力は絵1グループの次の能力にあってたいいである。

男児Bは夏休み後になって、音に対する注文のことばが発達したその過程にみられるように絵の表情も顔にしっかり表れていて7月から12月への育ちを感じさせている。が友達の中にいて一人遊びが優先してその状態にあり全体の育ちにやはり特長がみられ人の全身を捉えていないことと、音楽の演奏の能力に音楽の耳によるききわけの能力が伴っていない状態にある。また女の子Kは全体把握が遊び方の捉え方にも優先していて友達をよく見聞きの食い違い・トラブルを起こしてしまう。が友達に受け入れられた遊びはKがリードして発展させ続けていく。Kの絵はその遊びの育ちを感じさせる。6月・7月のはさまざまな方向から一度に捉えていた人の表情は12月になると人の立つ線が同じ線上に立ち並ぶように描かれているのである。この子供の譜例1による演奏能力はだいたいとらえている段階である。女の子Kをささげる女の子S・顔の女の子Yや男児E・Oは絵1のグループにして「女カーニバル」の遊びの音楽的表現をささえ、遊び全体を高めていたことになるのである。

VI 幼稚園児の知能

幼稚園における音楽指導を中心として子供の能力を生かす方法を考えては浅い。が音楽の伝達は確かに容易になり音楽のもつ内容の読み取りに幼児と教師共に感動できる事実は、子供の感性の成長を捉えることとなり、絵の描写をする。豪気が、話を作る姿勢、本を求める姿勢にも成長した姿を捉えるのである。が本当に子供の成長のどのような点に育ちがあるかときに確かなこととして自信をもつことができなかった。今度幼稚園全教員と本大学の協力を得て田中敏隆の知能検査を実施することができた。検査に使用している内容は新幼児用知能検査Bによる。この検査の選択は子供が絵をみて選択し〇印をつける操作により比較的簡単な内容であることに音楽に対する内在因子が調査できて、子供がどんな捉え方を得意としているか、その個性を確かめるうえで参考となること、子供のどんなところが欠点となっているなど成長の手立てと
中村：幼児と表現

して資料となると判断したからである。また田中においは値を高いために各能力に関係する値を高い経験や活動が低べる結果（それは教師の関わりとして理解するか）や遊びの中に取り上げられていくことによって因子能力の成長を期待できるとしていて、現在の教育の個性との対応に大いに活用できると判断したからである。

調査の内容は4つの因子を知の構造としていて、数・記憶・思考・知覚のそれぞれの因子を表している。4因子の内容は次のとおりである。

- 数因子：算数とか数字の問題解決を行うための基礎となる知の能力
- 記憶因子：さまざまな知識を覚える基礎となる知の能力
- 思考因子：解決困難な問題を一定の法則に従って考え合理的に解決する知の能力
- 知覚因子：図形とかその対象物の大きさ・方向を正確にとらえる知の能力

4つの因子のさまざまな優劣は、いろいろなタイプの子供の能力を示していて、今、どの能力がもっとも成長しているか、子供の理解の仕方はどのようなタイプであるかその子供の成長過程を教えてくれるのである。例えば数因子はその数にこだわるだけでなく、和を理解する子供タイプ・記憶因子は何でも覚えていて教えることにこだわる子供、また早く覚えてしまう子供タイプ・思考因子は知っていることを人との関係に生かして自分達で工夫していこうとする子供タイプ・知覚因子はいろいろな角度から正確に注意してとらえられる子供タイプなど関係する因子に考えられるのである。またこの検査テスト内容の問題形式は実際のようちえんの関わりとして用いていない。家庭の学習による問題理解の違いは測定されていない。が田中はその違いに余り影響ないと判断している。結果は5段階によって生年月日別に示されているが検査結果・年齢別に関係する能力内容を集計すると以下に示すとおりである。

### 新幼児用知能検査B（田研出版株式会社）結果

**対象：盛岡大学附属愛育幼稚園**

男児28人 女児37人 計65人

**検査日：平成5年11月26日（金）**

<table>
<thead>
<tr>
<th>因子</th>
<th>男女別</th>
<th>幼児</th>
<th>段階</th>
<th>5</th>
<th>4</th>
<th>3</th>
<th>2</th>
<th>1</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>数</td>
<td>男</td>
<td>3人</td>
<td>10人</td>
<td>8人</td>
<td>6人</td>
<td>1人</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>女</td>
<td>8人</td>
<td>17人</td>
<td>7人</td>
<td>3人</td>
<td>2人</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>計</td>
<td>11人</td>
<td>27人</td>
<td>15人</td>
<td>9人</td>
<td>3人</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>記憶</td>
<td>男</td>
<td>1人</td>
<td>11人</td>
<td>11人</td>
<td>5人</td>
<td>0人</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>女</td>
<td>2人</td>
<td>14人</td>
<td>21人</td>
<td>0人</td>
<td>0人</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>計</td>
<td>3人</td>
<td>25人</td>
<td>32人</td>
<td>5人</td>
<td>0人</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>思考</td>
<td>男</td>
<td>1人</td>
<td>6人</td>
<td>9人</td>
<td>8人</td>
<td>4人</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>女</td>
<td>5人</td>
<td>9人</td>
<td>7人</td>
<td>10人</td>
<td>6人</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>計</td>
<td>6人</td>
<td>15人</td>
<td>16人</td>
<td>18人</td>
<td>10人</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>知覚</td>
<td>男</td>
<td>6人</td>
<td>12人</td>
<td>8人</td>
<td>2人</td>
<td>0人</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>女</td>
<td>15人</td>
<td>13人</td>
<td>6人</td>
<td>3人</td>
<td>0人</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>計</td>
<td>21人</td>
<td>25人</td>
<td>14人</td>
<td>5人</td>
<td>0人</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

一般に幼児の発達は知覚・数・記憶・思考に順次に発達していると田中が見いだしているように、本幼稚園においても知覚・数能力は4・5段階に集中し、記憶能力は3段階以上に、思考能力は全体的な数値を示していて、子供の考え方によりこだわりのある配慮を工夫する必要性を示しているのである。

IIIの3による音楽の全体の演奏を豊かにしている能力は子供のタイプを理解して全体把握の中の旋律を覚える方法と拍子にこだわって数との関係から覚える方法の知覚と数能力による両面的な能力に影響していることを確認することができた次第である。ちなみにIIIの1女児Aのタイプは数・記憶5、思考・知覚4、総数値5（1Q126）の天才タイプであり、IIIの2による女カーニバルや、Vの演奏能力豊かな子供は総数値3と4にあり、数と知覚能力4と5の数値に示すように幼稚園児の音楽の特長を理解する能力の高さとの関係を示す共通性が見られる。思考能力は遊びの種類と内容によって数値変化が考えられるが現在において確定できない。
い。またⅢの１男児Bは検査に全く興味を示さず評価不可能となっている。また記憶と思考能力が４・５を示す子供の遊びタイプを考察するにどちらかといえばリードする立場より順応するタイプにみられている興味深く、また人の話を聞くことのできない子供は全体の総数値が低い場合や思考力が極端に低い１数値に示され関心のあるところであるがより一層の研究による子供の理解を必要とするところである。

Ⅶ 総合的子供理解とは

昨今２年間の本大学短期大学部学生２年生による本幼稚園の遊び行動チェックによる子供の観察記録がある。講義関係の関係により幼稚園の子供が遊びに慣れた時期の６月チェックであるが子供理解初期の学生は、集団の中にいて一人遊びをする特定の子供やガキ大将の行動チェックにどうも集中して遊びの形の記録に止まってしまう。子供一人ひとりの行動のこだわりや仲間の関わりによる子供の内面性を理解できないのである。が一般に幼稚園の教師側にも同じことが言えて、遊びの姿の外側をとらえたままになり今日の新しい問題を伴っているのではないかと考えられるのである。子供の自由遊びは手紙のと遊んでいるだけではなく子供の主体的な関わりを自由遊びにどのように継続させようとしてか、遊びを発展させようとする心の葛藤（内面性）や、そこに捉える一人ひとりの育ちなど、教師自身子供の育ちに正しく関与できないのである。教師が子供の仲間になることによって信頼感が育ち、子供の心の開放によって共に育とうとする教育の役割と教育の基本が薄れているのである。

言葉に示す自由と義務の関係と同じように自由遊びに遊ぶ目的が必ず伴うはずであるが幼稚園教師は生活のためのルールを「しつけ」と称して関わり急ぎでその育ちを何に帰すことも集中して一人ひとり育ちによる生活責任、あるいは当然の義務としての生活指導が繰り返し繰り返し必要としているにもかかわらず気付かないでしょう。また生よりも現在の子供の行動の観察チェックに欠けるなどの問題性が考えられるのである。子供一人ひとりの幼稚園という社会学習の始まりのゆえに非常に大切な教育行為であることを実践をとおして考えるのである。

上記IV～VI項目の調査に知るとおり子供はいろいろな能力の成長がある程度にさまざまなもの理解能力を高め合いながら、遊びを成長させているのである。遊びの継続するところに子供の高いお払いもあるように、幼稚園の遊び全体が大人（教師）からみて遊びの育ちを見いだすところには子供一人ひとりの総合的成長が期待できるのである。特に年長児の遊びの方向はこれまでの調査に述べてきているところも、全般的な親子の遊びや子供一人ひとりの育ちに影響しているともいても過言ではない。遊びのゆえに子供の心の育ちや主張による言葉による発表の場は個人にとって考える機と思考を高めることがあり、その結果、子供同士あるいは教師から評価を得ることによって一層自信を得、喜んで次の行動に移行するクリエイティブな要因が働き意欲的行動（遊び込み工夫をとる姿・遊びの手順構成して見せようとする姿・興奮し自分を確かめてみて驚いたことを教えようとする姿態など）をもとになることによって友達と高め合うステップとして存あるところに自由遊びの幼稚園活動は、はじめて意味のある内容となると思われるからである。

前項男児の育ちは友達との関わり方に上記の総合的に配慮する豊かな成長として捉えられることを感銘しているのである。また全体の比較的高い知覚能力因子の成長は幼稚園全体の豊かなより総合的音楽表現に大きく影響しているといえるのである。

教師の誰もが子供の成長を期待して研鑽するのであるが、多種多様な自由遊びの姿を前にして子供の「人を捉える目や興味ある能力因子」を把握して子供を理解し、安心して心の開放を得るような関わりを大切にしながら、より子供が幼稚園にいて自由的なくなり組める方法を能力に応じて「友達交流に任せたり、個人的に導い
中村：幼児と表現

たとし、日々いろいろな方法を考えなければならないのである。友達の交流・豊かなるコミュニケーションの育つところに、一人ひとりの豊かな育ちを捉えることは前述のとおりでありキース・スワインクの個性の育ちと社会性は、いろいろ個人と社会性の論理に類似していて確かなことである。幼稚園のより行動範囲の広い自由遊びにかかわる子供理解としての考え方・幼稚園教育上の遊び理解としての確と考えるからである。総合的な成長を期待して取り組む数々の方法と反省から、社会性を抽出出した子供のコミュニケーション遊びからとらえ指導目的をのべた様子は本大学3号に記載しているが総合的成長は地域にふさわしい内容、幼稚園全体の特長にあった内容、子供の今日にあたる内容をとって理解し、現在の教員の能力との接点によって、よりクリエイティブな幼稚園教員全員のとりくみ、最良にできることからして環境考案されて、はじめて子供一人ひとりの総合的教育が保たれると考えるのである。

まとめ

平成5年10月26日（火）第8回東北地区私立幼稚園教員研修会（岩手大会）第9分数会「子供と表現」公開園として本愛育幼稚園はその責務を担うことになった。これまでの子供の遊びに内因性をとりず公開の意図をどのように設定するか子供の今日の活動によるところが多く教員の遊びの読み取りその予測に苦労したところである。が当日は子供が住んでいただける喜びと公開をとらえる教員側の姿勢と一致していろいろな遊びが発展し、内容の豊かな表現となり研究テーマにふさわしい公開評価を得ている。当日の講師館紅からのことばに個々の遊び姿の評価を除く全体的な幼稚園の公開としてこのような評価を得ている。

・教師と子供が信頼させている遊びの姿であったこと、子供が自由に遊び込んでいるところに教師は安心して捉えていて教師自身の存在がめだたなかった。

・自分に遊び込んでいた子供の姿はお帰りの教師との話し合いにどの子供もいきいきとして集中して参加していたこと。

・見た遊びが沢山あった中にトラブルが発生していたが子供同士の手加減ができていてほどよく解決されたこと。

また参加教師からは

・男女がどの遊びにも性的意識やこだわりがない一緒に楽しんでいること。

・汚れていることに気がついて席や廻取りを持って掃除をしている子供がいたこと。事実、子供のトラブルや掃除の姿は私のもとより本幼稚園教師が気が付かず、公開についての分科会に知った次第であった。参加教師による後者の評価は園長長老であり宮沢賢治の教え子であった井井謙二郎先生の公開評価であった。

以上の内容は幼稚園関係者以外の他者による評価であるが、この評価内容は子供の責任ある行動による評価であって、改めて本幼稚園の自由遊びとその表現による子供の総合的子供の成長の捉え方と研究方向に誇りをもった次第である。

幼稚園の教育は子供の一ひとりの育ちとして子供の身体や能力の発達以上に人格の基礎となる責任ある心の育ちの実践の場として期待していられない。子供の主体性ある学びの活動を見る遊びは、自発的行動と独自性が育ち、成功のための行動として選択性が確かになったが、行動のための努力ネット・ステップ・ジャンプの遊び音楽の背景は子供一ひとりの参加しようとする能力が総合的に関係して主体性豊かな意欲ある行動として発展し実現される。そしてなにもより責任ある行動の育ちを考えるとき、子供の遊びによる全体の生活に培かれるような根気の要する教育の責任を感じないでいられないのである。その努力は自分勝手に参加するわいわい・ガヤガヤとした姿を違え、自己確立のための責任ある行動の育ちによる参加を得ることになると考えるのである。ここに集合の必要性については論じ得ないが、その行動はどの子供にも通じるよる自主性豊かな生涯を通じる育ちと考えるからである。
教師にとって必要なことは子供の遊びの学び
となる総合的に豊かな人材であることと、より
豊かな基礎・基本の交わりを子供と遊ぶことの
できる能力への努力であろう。前項の絵と音楽
能力の結果に示しているとおりより確かかな内容
であればある程、個人の能力に適合して一層豊
かな子供が多く育まれているのである。子供一
人ひとりの成長のために教師の総合の人材を高
める努力と、遊びについてさらなる研究を必要
とするところである。

尚 研究を提供する盛岡大学附属愛育幼稚園
教職員 教頭鎌田多恵子 年長児担任柏田祐
子・大家倫子 年中児担任中村美子・武藤麗
理子 年少児担任岩渕美重の実践と配慮に感謝
する次第である。
楽譜1

「むしのこえ」

作詞 岡本敏明
イギリス曲
編曲 教員一同

歌遊びと子供の鍵盤ハーモニカの音当て遊びをステージ用に工夫している。歌の遊びとして輪唱がはじめてできたことに喜びがあったがステージとなると音程に無理を生じたため、他旋律を聴いて歌唱したり演奏することを目指している。編成内容Ⅰソプラノ鍵盤・Ⅱアルト鍵盤・Ⅲ歌による。

[歌詞 はら なっている おにわで すずむしが リリリリリン リリリリリン]
楽譜 2

「アルハングラの想い出より」

フランシスコ・ダリルガ曲
中村 ウメ鍵盤楽器用編曲
中村：幼児と表現

編成内容
I・・・ソプラノ鍵盤ハーモニカ
II・・・アルト鍵盤ハーモニカ
IV・・・ベース鍵盤ハーモニカ
演奏方法は全体を次の要領で2回繰り返して演奏している。
1回目はアルト鍵盤ハーモニカによるパートIの旋律中音域による演奏
2回目は演奏パート選択希望によって学んだ楽譜2のパートによる演奏
楽譜上の四分休符は記譜していない
参考文献
ジェームス・L・マーセル著 美田節子訳
『音楽的成長のための音楽』音楽之友社
ロザンンド・ジューター著 賞井行子訳
『音楽才能の心理学』音楽之友社
がくふの会編
『音の織りなすパフォーマンスの世界』昭和堂
ジョン・ベチナー・アストン共著
山本文茂・坪能由紀子・橋都みどり共訳
『音楽の語るもの』音楽之友社
ネルソン・B・ヘンリー編 美田節子訳
『音楽教育の基本的概要』音楽之友社
全国教育研究所連盟編
『個別化教育の進め方』小学館
森 隆夫著
『新・生涯教育と学校教育』教育開発研究所
楠原敏昭著
『自立する子ども』音楽之友社
F・W・アロノフ著 畑 瑠子訳
『幼児と音楽』音楽之友社
キース・スワンウィック著 野波健彦他訳
『音楽と心と教育』音楽之友社
大畑祥子・小川博久・大場牧夫共著
『創造的音楽学習の試み』音楽之友社
上田礼子
『日本版デンバー式発達・スクリーニング検査』
竹井機器工業株式会社
田中敏隆著
『新幼児用知能検査B』田研出版株式会社
盛岡大学短期大学部紀要 第1・2・3・4巻
『幼児と表現（音楽）〜パフォーマンス教育』